

第 64 回日本臨床細胞学会秋季大会

2025.11.29-30 広島国際会議場

P-1-30

生殖医療施設である当院における子宮頸部細胞診の現状

小西晴久

IVF なんばクリニック

**【背景】** 生殖医療の保険適用以降、若年層の生殖医療施設へのアクセスが容易となった。不妊治療を契機に子宮頸部細胞診を行うことは、検診機会を提供するという意味でも重要である。一方で、生殖医療施設における細胞診の実態やその転帰に関する報告は限られている。

**【方法】** 対象は、2022 年 1 月～2024 年 12 月に当院初診時に、過去 1 年以内に子宮頸部細胞診を未受診であった患者 2382 名で、年齢、細胞診所見及び経過を診療録より後方視的に観察した。

**【結果】** 平均年齢は 38 歳（25～47 歳）で、子宮頸部細胞診結果は、正常所見（NILM）は 2261 例（94.9%）、異常所見を認めたのは 117 例（4.9%）であった。異常所見の内訳は、ASC-US 61 例、LSIL 43 例、HSIL 9 例、ASC-H 4 例、検体不適正 4 例であった。検体不適正は全例月経中に採取したものであり、再検にて正常であることを確認した。ASC-US 例のうち HPV ハイリスク検査の陽性は 15 例であった。それらを含む異常所見を認めた 71 例を他の専門

施設へ紹介した。精密検査結果は、CIN1が25例、CIN2が16例、CIN3が10例、異常なし22例であった。CIN3の10例とCIN2の1例に対して子宮腔部円錐切除が10例、子宮腔部レーザー蒸散が1例で、その他は細胞診 follow up による経過観察となっていた。治療を行った11例の不妊治療再開まで平均8.3か月であった。異常所見を認めた117例中114例（98%）が生殖医療を実施し、62例（53%）が妊娠、19例（16%）が治療継続中である。

【まとめ】異常所見の割合は一般集団の頻度と同程度であった。不妊治療を契機として、検診未受診もしくは間隔があいている症例を拾いあげ、また、異常所見を認めた症例でも多くは不妊治療・妊娠に繋がっていたことで、生殖医療施設としての役割が再確認された。